

メルロ=ポンティの戦後 ——暴力と平和をめぐる——

川崎 唯史*

はじめに

本稿の目的は、メルロ=ポンティの著作を手がかりとして、暴力からの回復について考察することにある。メルロ=ポンティを参照して回復を論じた研究には、村上靖彦の独自の仕事がある（村上 2011, chap. 3）。意味の創造性を取り戻すことが回復にとって本質的だとする村上の視座を受け継ぎながらも、本稿では異なる文脈に属するテキストを扱いたい。暴力からの回復という側面を際立たせるためである。

本稿で問題となる暴力は、何よりもまず第二次世界大戦である。この「ほとんど杳然と立ち尽くすしかないような圧倒的な現実」を前にした努力としてメルロ=ポンティの思考を捉える限りで、本稿は細見和之の『「戦後」の思想』の一異本となることを目指してもいる（細見 2009, pp. 5-6）。ここで見出そうとするのは、世界大戦というかつてなく暴力的な出来事を例外としてではなく、私たちの生の根本的な状況を露呈させるものとして理解した上で、きわめて困難な回復の道を展望する哲学者の姿なのである。

ところで、メルロ=ポンティ研究の歩み——とりわけこの国の——からすれば、本稿の試みは無謀に映るかもしれない。一冊の本としては日本で初めて出版されたメルロ=ポンティ論の中で、すでに港道隆は次のように述べていた。「メルロ=ポンティにおいては〈存在〉は、人間と世界、人間と人間との普遍的共存、〈予定調和〉を保証し、あらゆる暴力や死は二次的である」

*大阪大学大学院文学研究科博士後期課程・日本学術振興会特別研究員 DC

(廣松・港道 1983, p. 176)。高橋哲哉はこれを承けて、きわめて強力なメルロ=ポンティ批判の中で、「暴力は平和の、悪は善の、災厄は至福の、死は生の、誤謬は真理の経験的変様なのであって、われわれは「真理のうちにいるのだ」と言えるのと同様に〈平和のうちにいるのだ〉とも言えることになるだろう」と書き、こんな言説を受け容れられるだろうかと問いかけた(高橋 1992, p. 137)。以後、例えば現象学的な他者論をまとめる際には、「自他未分化な体験」の原初性や「自他の等根源性」を主張する立場にメルロ=ポンティを数え入れることが通例となった(廣松ほか 1998, p. 1032。「他者性」(浜渦辰二執筆))。こうした理解が疑いの余地なく妥当だとすれば、なるほどメルロ=ポンティが暴力からの回復を語ることはないだろう。

しかし、このように平和を所与の前提とみなし、暴力をその二次的な変様とする考えをメルロ=ポンティに帰するときには、暗黙裡にでもある選択がすでになされていなければならない。それは、哲学的な著作と政治的な著作を峻別した上で、後者を無視する、または例外として軽視するという選択である。例えばB. シシエールは、政治的著作を「知覚についての一般的な諸テーゼの個別的展開」と見るか、「[知覚についての諸テーゼ]と直接的で単純な結びつきをもたない」とみなすかの二者択一を立てた上で後者を選んでいる(Sichère 1982, p. 105)。しかし、何よりもメルロ=ポンティ自身が哲学の論文と政治の論文をともに収めることで『意味と無意味』(1948)と『シーニュ』(1960)という二つの論文集を編んでいるという事実がある以上、この選択の正当性は自明ではない¹⁾。

逆に、もしいわゆる哲学的著作と政治的著作を併せて考察するならば、メルロ=ポンティの思想において平和は保証されていると主張することには問題が生じる。当然、港道も高橋もこの点に気づいていたが、ともに「否認」の概念を用いることで、政治論文における暴力の根本性の主張は哲学書には存在しないかのごとく解釈している²⁾。しかし、1) そもそも哲学的著作において暴力は本当に二次的な位置に置かれているのだろうか。また、2) 哲学

論文と政治論文の間に平和と暴力に関する理論的なつながりは本当はないのだろうか。

以下、まず二つのテキストの検討を通して最初の問いに答える（第一節）。次に、戦後の諸著作に通底する暴力の位置と性格を考察することで、二番目の問いに答える（第二節）。最後に、メルロ=ポンティが暴力からの回復の道をどこに見出そうとしていたかを明らかにする（第三節）。

1. 「平和な共存」？

メルロ=ポンティ研究において、平和な対人関係は暴力的なそれに対して一次的だとする解釈の拠り所は複数あるが、ここでは『知覚の現象学』（1945）と「幼児の対人関係」（1951）を検討しよう。

いずれの著作においても、メルロ=ポンティは当時の児童心理学の知見を参照している。『知覚の現象学』では、私とその指を噛むまねをするのを見て口を開く赤子の例から、「噛む」ことは彼にとっては最初から間主観的意味をもっている」（PhP, 404）と述べる。他人の知覚とは目に見える行動の知覚であって、内奥の意識の類推ではないことを主張する文脈でのことだが、この件の終盤にも再び幼児の経験を取り上げて、「私密的な主観性」を重視して自他を別々の展望に切り離す成人の客観的思考を退けている³⁾。「平和」という語はこの流れの中で現れる。

コギトとともに、ヘーゲルの言うように、その各自が他者の死を追求するような諸意識の戦いが始まる。[だが、]この戦いが始まりうるためには、つまり各意識が異他的な現前を推測し、それを否定しうるためには、これらの意識は共通の地盤をもっていなければならないし、幼児の世界における平和な共存（leur coexistence paisible）を覚えていなければならない。（PhP, 408）

ここで平和に対置されているのはヘーゲル＝コジェーヴ的な生死を賭けた戦いであり、この闘争は相互に独立した意識同士のものとして解されている。メルロ＝ポンティはしかし、闘争が唯一の間主観的な世界における「平和な共存」に基づくという点を重視している。こうした記述に基づいて、議論の結びでも「交流の拒否もまた交流の一種態である」(PhP, 414)と言われるのを見れば、確かにメルロ＝ポンティは平和を基礎に据えた上でその派生として暴力を捉えていると考えたくなるかもしれない。しかし、二つの点を考慮に入れる必要がある。一つは他人知覚論全体の構成であり、もう一つは結論として提示される共存の意味合いである。順に見ていこう。

1) 幼児の平和な共存は議論の出発点であって結論ではない。まず確認しておく、『知覚の現象学』の他の章と同様に、メルロ＝ポンティは「客観的思考」の批判から他者論を始める。この従来の発想は、主観と客観の二項対立のもとで他人の問題も扱うので、主観の意識が構成する限りでの他人は意識なき即自存在となってしまう。それゆえ、「客観的思考のうちには、他人や意識の多数性のための座は存しない」(PhP, 402)。児童心理学が援用されるのは、「知覚される身体〔……〕という始原的現象」(PhP, 403-404)に訴えて客観的思考を退ける試みを補強するためである。「幼児の対人関係」も、「古典心理学」の批判という形をとった同様の試みから始まっている(PC, 171-181)。

しかし、議論はさらに二つの段階を踏むことになる。その全体を捉えなければ十全な理解は得られない。第二の段階では、真の共存が成り立つために必要な各自の自己性が強調される。「共存は、両者のいずれの側においても生きられねばならない」(PhP, 410)。自他がそれぞれ共存を経験していなければ、そこには誰でもない「集合的意識」(PhP, 409)しかないだろう。この段階ではフッサールの「付帯現前化」の概念が援用され、自他の「状況は重なり合わない」(ibid.) こと、つまり他人の行動の知覚はできても他人と同じ経験はできないことが示される。これが「生きられた独我論」(PhP, 411)と

呼ばれるために、前段階の議論が否定されたかにも見えるが、メルロ=ポンティ自身が言うように、両者は相互に補完し合って一つの理論を構成すると見るのが適切であろう⁴⁾。

第三段階では、各自の自己性を踏まえた上で再び共存の可能性が論じられる。今や自他の共存は「多数での独我論」という馬鹿げた状況にも思われるが、メルロ=ポンティはこれを「理解せねばならない」という (PhP, 412)。したがってこの段階も、前段階の否定ではなく、第一段階と第二段階のバランス調整と解すべきである。つまり、私と他人が同じ一つの世界に存在し、そこに有意義な行動として姿を現す限り、他人の知覚や交流は可能だが、それぞれが経験の主観としての自己性をもつがゆえに、自他の一体化は不可能である。それゆえ、結論として共存が主張されるとしても、それは自他の差異なき平和な共存とは区別して理解せねばならない。

このように、メルロ=ポンティの他者論は、1) 知覚と行動の発見による客観的思考の否定と平和な共存の提示、2) 主観の自己性の消去不可能性の主張、3) 自他の区別を前提とした共存の可能性の論証、という三つの段階を辿ることによって初めて一つの議論として成立する。発達に沿って議論が進む「幼児の対人関係」でもこの点は動かない。本論第一章の「理論的問題」と第三章第一節「自他の癒合系 (六ヶ月以後)」が第一段階にあたり、第二節「三歳の危機」が第二段階と第三段階に相当すると解せる。このように議論の全体を踏まえるならば、平和な共存がメルロ=ポンティの最終的な主張であるとはおよそ言いがたい。

2) それでは、メルロ=ポンティが最終的に主張するところの平和ならざる共存とは何か。この問いについて二つのテキストは異質な議論を展開しているが、暴力が排除されていない点は共通する。簡単に確認しておこう。

『知覚の現象学』は文化的・社会的世界の構成分析に向かう道として他人の知覚という問題に取り組んでいるため⁵⁾、確かに重心は唯一の世界における共存を示すことに置かれている。しかし、他人の知覚に関する結論部分で、

知覚とは「暴力的な作用」であると主張されていることは見逃せない (PhP, 415)。メルロ=ポンティは、「愛する」という現象を例に知覚の暴力性を記述する。知覚は一回きりのものではなく、事物や他人から次々に与えられる知覚を置換することを通して真なる知覚に接近していく過程である。当然ながら、その過程において、それまで抱いていた愛する人のイメージ (美しい、立派だ、素直だ、など) が崩れることがありうる。この過程には、知覚が他人について誤ったイメージを私に与えること、つまり不当な断定の可能性がつねに潜んでいる。一度イメージが砕かれたとしても、新たなイメージもまた不当な断定にすぎないかもしれない。要するに、いつでも他人を誤解しかねないことが暴力として捉えられている。そして、この世界では他人との共存が避けられない以上、私は間違えるかもしれないにもかかわらず他人を知覚せざるをえない。『知覚の現象学』の他人知覚論からこれ以上のことは言えないが、愛の記述から共存の暴力性が垣間見えることは確認できた⁶⁾。

次に「幼児の対人関係」だが、『知覚の現象学』との差異から言えば、幼児における自他未分化の状態が単なる平和ではなく暴力に転じうるものとしても描かれており、結論の共存にもこの暴力性が残り続けるという仕方で論じられている点が重要である。先述したように、最初に自他の癒合態が論じられ (三歳まで)、次に自他の区別が重要になる (三歳の危機) という点は変わっていない。しかし、『知覚の現象学』では「平和な共存」として肯定的な現象だけが記述され、ヘーゲル的な闘争とは対置されていたのに対して、「幼児の対人関係」では、奴隷による主人の「承認」が「自己と他人の混乱」つまり自他の未分化として捉え直される (PC, 211)。その上で、「嫉妬」や「残酷さ」といった幼児の否定的・暴力的な態度が記述される (PC, 211-215)。そして、自他それぞれの主観性が際立ってくる「三歳の危機」の記述においても、それ以前の自他の不可分性が消失するわけではなく、愛のような重要な状況において再び現れるという議論——ここには高次の段階への決定的な移行を認めず、つねに逆戻りの可能性を残すという『行動の構

造』(1942) 以来のメルロ=ポンティ独自の弁証法がある (cf. SC, 224) —— によって、共存に暴力が含み込まれる次第となる (PC, 226-229)。

「幼児の対人関係」において詳論された鏡像とのナルシスティックな関係が後年の「肉」の存在論に直結することを考えれば、ここから『見えるものと見えないもの』における暴力の問題に移ることもできそうだが、それは本稿の課題ではない。むしろここで問うべきは、『知覚の現象学』と「幼児の対人関係」の間に存する、共存に関する概念布置の動揺は、どのようにして生じたのかということである。ここには明らかに、暴力と平和をめぐる思考の変化が見て取れるからである。

この問いに対する本稿の見立ては、この動揺は政治的なテキストにおいてこそ最も顕在的に現れているというものである。次節では、「戦争は起こった」(1945) と『ヒューマニズムとテロル』(1947) を中心にこの点を検討する。

2. 根本的な暴力

2.1. 一般化の暴力と歴史のドラマ

まず注目すべきは、雑誌『現代』創刊号に掲載された論文「戦争は起こった」における平和の性格である。この論文の趣旨は、戦前のフランスの「楽観的な」哲学が、実のところ第一次大戦の戦勝国という政治的状況によってのみ可能だったことを、第二次大戦の経験が明るみに出したという主張にある。ここで平和は、このいわばおめでたい哲学が享受し、当然の所与と思いつ込んでいたものとして捉えられる⁷⁾。しかし大戦の勃発は、フランスがたまさか「例外的な状況が結合されてできた、平和と経験と自由の場所」(SNS, 170) だったにすぎないことを露呈させた。

ここでメルロ=ポンティは、平和——そこで人は自由な個人として尊重される——を例外的なものとして位置づけている。代わりに基本的な状況とみなさ

れるのは、疎外的なまなざしを向けてくる他人との敵対的な共存である。フランスがドイツに降伏し、パリがドイツ軍に占領されてからの対人関係がその範例をなす。そのときパリの住民は、ドイツ軍のまなざしの下で「人間としてではなく「フランス人」として自分を感じねばならなかった」(SNS, 172)。これを「一般化」(SNS, 173)の暴力と呼ぶことができるだろう。私という個人が「フランス人」という一般的な社会的性質に還元されるからである。社会的な一般性という考えそのものは『知覚の現象学』でもすでに出されていたが、そこではもっぱら自分の「一般化された実存」(PhP, 513)を自分なりに捉え直し、引き受けることで決断や行動が生じる次第が論じられていた。それに対して、この戦後の論文では、自分の歴史的な事実性に基づいて一般化されるという経験が強調されている⁸⁾。

しかし、それは単に受動的な現象ではない。

私たちは理解していなかったのだ、ちょうど役者が、彼の理解を越え、彼の一つ一つの動作の意味を変えてしまう役割の中に滑り込んでゆき、彼自身がその産み手でもあるが囚われ人でもあるあの大なる幻を彼の周囲に連れ歩くように、共存の中にいる私たちは誰も自分の選んだのではない歴史性の背景のもとで他の人間に対して姿を現し、「アーリア人」、ユダヤ人、フランス人、ドイツ人として (*en qualité*) 他の人間に対して振舞っているのだということを。[……] (SNS, 175, 強調原文)

一般化は、ある者から別の者へ向けられるまなざしに尽きない。実際にまなざしを受けてからか、まなざしを先取りしてか、私たちは自分の性質に従って「振舞う」。この現象を説明するために「大なる幻」をまとう役者を引き合いに出すとき、メルロ＝ポンティはデイドロの『俳優の逆説』を暗に参照している。この言葉は、すでに『知覚の現象学』のシュナイダー症例の分析において、実験的状况で抽象的運動を行う身体を説明する際に引かれてい

た (PhP, 121)。また、「コギト」の章で感情を論じる際にも、それと知らず想像的で偽りの恋に落ちている少女の状態について、「役者が自分の役の中でそうするように、少女はそれら〔彼女の現在の感情〕の中で自分を「非現実化する」のである」と述べている (PhP, 435)。サルトルが想像力論で用いた「非現実化」の概念を積極的に取り上げ直している点で注目に値する議論ではあるが (cf. Sartre 1986, p. 368)、『知覚の現象学』ではこの役者の比喩が社会的世界の経験に結びつけられることはなかった。「戦争は起こった」において初めて、社会生活が「幻たちの対話と闘い」(SNS, 175) であること、つまり想像的なものが社会生活の隅々まで浸透していることが示されるのである。その二年後、『ヒューマニズムとテロル』の序文の中で、メルロ=ポンティは再びデイドロに言及しつつ、私たちの社会生活が不純なイメージと役割の幻に満ちていることをより明確に指摘することになる。

公的人間は、他人たちの統治に好んで手を出しているのだから、他人たちがその報いを蒙るところの彼の行為や、他人たちが彼についてもたらずしばしば不正確なイメージにもとづいて裁かれても文句は言えない、ということを私たちは示した。デイドロが舞台上の役者について述べていたように、私たちの主張するところでは、ある役を演じることを引き受けた人間は誰もが自己の周囲に「大いなる幻」をまもっていて、今後はそこに身を隠すのであり、また、彼は、たとえそこに自分になりたいと欲しているものを見出さないとしても、その役柄に責任を負っている。(HT, 25, 強調原文)

前節で愛に関して述べたように、他人の知覚が不正確なイメージを必ずしも排除しないという論点は『知覚の現象学』にも見出せる。しかし、イメージを抱かれる側に身を置いた上で、これを社会的・歴史的な役割を演じることに付随させた点、さらにはたとえ望まない役回りであっても責任があると主

張する点において、戦後の政治的著作は議論を前に進めていると言えるだろう。

歴史という単一のドラマに巻き込まれている私たちは、その都度の状況から何らかの一般的な役柄を押し付けられ、それを演じることが何を意味することになるか予見できないままにそれを引き受ける。「戦争とは存在することへの我執を描く武勲詩またはドラマである」(Levinas 1990, p. 15)と述べるレヴィナスにとって、メルロ=ポンティのこうした立場は主体を存在に従属させる存在論であり、何としても乗り越えるべきものだっただろう。実際、『存在するとは別の仕方』(1978)の中でメルロ=ポンティの名前が出るのは、「主体とその世界を一つの世界に集約すること」すなわち「根本的歴史性」を語った者としてだけである(ibid., p. 76, 114, 250, 259)⁹⁾。レヴィナスは「隔時性」や「身代わり」の概念によって、あるいは独自の正義論¹⁰⁾によってこの歴史性から主体を救い出そうとしたが、メルロ=ポンティはむしろ歴史の内側に留まり、役割やイメージといった想像的なものと予期せぬ偶然の出来事に満ちたこの「ただ一つのドラマ」(PhP, xiv)を理解しようと努めた。その結果、共存が避けがたく引き起こす相互的な一般化という暴力的な現象が明るみに出されたのである。

2.2. 他の自由への侵食

戦後のテキストには、一般化とは別種の暴力も見出される。まず「戦争は起こった」において、占領下ではフランス人として誰も潔白を誇ることはできないとして、「人は〔占領下に〕留まることによって妥協し、出ていくことによって妥協したので、誰一人としてきれいな手をした者はいない〔……〕私たちは「純粋道徳」を忘れ、民衆の健全な不道徳主義を学んだ」(SNS, 178)と語られる。E. ド・サントベールは、この「汚れた手」という形象が1946年の講演「実存主義の政治的・社会的側面」の準備ノートでも反復されていることを紹介した上で、「侵食する(empiéter)」とは直ちに汚すことの同義

語である。侵食は不純で不道德であり、この「民衆の健全な不道德主義」に属している」(Saint Aubert 2004, p. 39)と指摘している。このように、メルロ=ポンティの後期思想の鍵概念の一つである「侵食(蚕食)」が初めて姿を表すのは、他人の自由の侵害としてなのである。

ここには、医師が語る幼年期への退行と同じ意味で、政治思想における真の退行がある。「そもそも人間の条件は善い解決が存在しないように出来ているのではないか」という、ギリシャ人たち以来、ヨーロッパがそれとなく匂わせてきた問題を、彼らは忘れたがっているのだ。どんな活動も、私たちが全面的には制御できないゲームへと私たちを巻き込むのではなからうか。多人数での生活にかけられた呪いのごときものが存在するのではないか。少なくとも危機の時期には、各々の自由は他の諸々の自由で侵食するのではなからうか。[……]政治の営みは、それを放棄することなど考えることもできない一個の文明を可能にすると同時に、根本悪を伴っているのではなからうか。(HT, 30, 強調引用者)

メルロ=ポンティにおいて悪は善の変様にすぎないとした高橋の見解に強く抵抗する箇所だが、「退行」の概念が用いられているのも見逃せない¹¹⁾。退行している「彼ら」とは、「潔白な意識をもった自由」と「重大な帰結を伴うことのない率直な発言」(ibid.)が可能だと信じる哲学者たちを指すが、これは戦前の楽観的な哲学を戦後にも唱え続ける者である。社会生活を根本的な悪と暴力を伴うものとして直視することが、大人の哲学者には求められる。この点でメルロ=ポンティの模範となるのはモンテーニュである。上の引用の直前で「公共の利益が、裏切りや、嘘や、殺戮を要求する」(HT, 29; cf. Montaigne 2009, p. 15)という『エッセー』の言葉が引かれているが、この一節は「モンテーニュを読む」(1947)でも参照されている。公的生活においては、自分が選んだわけでもない人々との付き合いが避けられない。「そ

ここでは各人が、自分の思考の代わりに、他人の目や言葉に映ったその反映を持ちこむ。もはや真理はなく、もはや、パスカルが後に語るであろう自己に対する自己の同意はない」(S, 258)。他人から分離した自律などおよそ不可能であるがゆえに、侵食は生じる。なお、「他人との諸関係においては、想像力や威信がつねに支配する」(ibid.) とあるように、前項で見たのと同様にここでも社会生活が想像的なものに満ちていることが指摘されている。

以上で見てきたように、『知覚の現象学』ではほとんど語られなかった共存の暴力的な側面は、戦後の政治的著作ではむしろ根底的なものとして前面に押し出されている。ところで、この姿勢は戦後の一時期にだけ取られたものではない。確かに、「意識と言語の獲得」講義(1949-50年度)、コレージュ・ド・フランスの教授職への立候補に際して1951年に書かれた二つの文書、そして1953年の就任講演「哲学をたたえて」において、ソシュールなどの言語学の成果を取り入れた「表現」の研究に基づく新たな歴史哲学が構想されているのを見ると(CS, 85-87; PD, 31-34, 45-47; EP, 55-57)、本節で検討した議論が存続しているのかどうか疑われるかもしれない。しかし、前節で見たソルボンヌ講義に即して言えば、まず社会生活における演技の現象が「他人の経験」講義(1951-52年度)で比較的詳しく検討されている(CS, 563-567; cf. Dufourcq 2012, pp. 112-118)。本稿では取り上げられないが、酒井麻依子が指摘するように、この講義では他人が一般的な役割に埋没して消える次第が記述される(酒井 2015)。前項で考察した一般化の暴力をここに認めるのは難しくない。また、前節で触れたように「幼児の対人関係」の終盤では、幼児における自他の不可分性が成人においても重要な状況で再び現れることの例として愛が語られるが、そこでメルロ=ポンティは「他人の意志への侵食でないような愛を考えることができるだろうか」(PC, 227)と反語的に問うており、戦時の経験から導出された暴力的な概念が活かされていることが確認される。かくして、本節の課題、すなわち共存における平和と暴力の概念に関する変化を戦後の政治的テキストに見出す作業は果たされ

た。

さて、本稿全体の目的は暴力からの回復をメルロ=ポンティに見出すことだった。ここまでで示してきたのは、戦後の彼の思考において暴力は平和の二次的変様ではなく、むしろはじめにあるものだということである。とりわけ『ヒューマニズムとテロル』はこれ以上なく明確に、歴史における私たちの共存が必ず暴力を伴うことを主張している。しかしメルロ=ポンティは、この世はどこまでも不条理が支配するパワーゲームだと主張しているわけではない。彼の暴力論の核心は、人間的な世界への回復は可能だが、それもまたある種の暴力を介する他ないという考えにある¹²⁾。

私たちは純粹さと暴力の間で選択するのではなく、多様な種類の暴力の間で選択する。私たちが受肉している限り、暴力とは私たちの宿命なのだ。[……]暴力とはすべての体制に共通な出発点となる状況である。生活も論議も政治的選択も、この土台の上でしか生じない。重要なのは、そしてまた、論議すべき主題は暴力ではなく、暴力の意義またはその未来である。重要なのは、未来へ向けての現在の、他者へ向けての自我の跨ぎ越しという人間的活動の法則なのだ。(HT, 127-128)

次節では、再び『意味と無意味』に戻って、平和への回復がどのように展望されているのかを考察しよう。『ヒューマニズムとテロル』でも回復の道は語られているが、それはプロレタリアによる人間性の実現として、明確にマルクス主義的な枠組みでソ連への支持とともに提示されており、歴史的な反省を含めたその考察は本稿よりもずっと広い紙幅を必要とするからである。

3. 平和への回復に向けて

3.1. 現在の解説

人間的な世界が壊れているということは、一面では、状況が混沌としていて未来に向かう方向が見出せないということである。こうした意味での「歴史における偶然性」(SNS, 198)、または未来の予見不可能性 (cf. HT, 25-26) もまた、戦後のメルロ=ポンティの著作において際立ってくる論点である。そこで、先の見えない混乱した状況から回復するための方法として提示されるのが「現在の解説 (lecture du présent)」である¹³⁾。この概念は『ヒューマニズムとテロル』の副読論文とでも言うべき「真理のために」(1946)に登場する。

私たちの唯一の手がかりは、現在の出来る限り忠実で完全な解説、すなわち、現在の意味を予断せず、混沌と無意味が見出されるときにはこれを認めさえもするが、方向と理念が姿を現すときにはこれを現在の中から識別することを拒まない、そのような解説にある。(SNS, 205)

「方向と理念」、すなわち歴史の意味を混迷した現状から識別して選び取ること、それが現在の解説と呼ばれる。この概念が対抗しているのは、計画や目的の形で未来を表象するという発想である (cf. HT, 141)。まず目的を立ててから現状を意味づけるのではなく、現在の丁寧な理解を通して向かうべき方向を浮き彫りにしようというのである。

現在に定位するとはいえ、この解説は、知覚と同じくいつでも誤りうるものである。しかし、誤る可能性を恐れて立ち止まることもまた一つの選択でしかないため、メルロ=ポンティは、間違っているかもしれない解説に基づいて行動するよう示唆している。

マルクス主義者はどんなに天才的であっても彼自身の決定のうちに、誤謬、偏向、混沌の可能性があると認めるのである。決定的な瞬間とは、人間が客観的な歴史の中に読み取れると思う、そのような事態の流れを自分で捉え直し、引き継ぐ瞬間のことだ。そしてこの瞬間、結局のところ彼は自分を導くのに、出来事についての彼自身の展望しかもないのである。(SNS, 201, 強調原文)

言い換えれば、現状をカオスと捉えた上で秩序ある世界の理念を無から立てるのではなく、現在を注意深く知覚して、不確実ながらもその中に何らかの方向を読み取り、その偶然の流れに自分なりに乗ることで歴史の意味を実現すること、これがメルロ=ポンティの提案する予見不能な未来への対処法である。戦後の著作では歴史の偶然性が前景化するだけでなく、これに対峙するための冒険の手立ても考案されているのである。ここに、暴力的な現実から回復する道の一つを見出すことができるだろう¹⁴⁾。

したがって、事実の星座を一定の方向に結合し直すことによって、最終的に歴史の中に理性を置くのは意識なのである。歴史の企てはすべて、事物の絶対的に合理的な構造らしきものによって保証されることは決してないので、なにかしら冒険の部分を含んでいる。そこにはいつでも偶然の利用ということが伴い、いつでも事物（さらに人間）を相手に策略を用いねばならない。なぜなら事物とともに与えられていない秩序をそこから引き出さねばならないからである。(SNS, 202, 強調原文)

3.2. 実効的な平和

最後に、より広い視野で考察してみよう。八幡恵一も述べているように、一見すると雑多な論集である『意味と無意味』は、「偶然性の克服」という観点から一貫して読み通せる（八幡 2010, p. 48）。書名に即して言い換え

ば、意味の創造によって無意味を克服するというモチーフが通底しているのである。この点は、序文を締め括る次の言葉からも明らかである。

セザンヌが、はたして自分の手から生まれたものがある意味を提供し、そして理解されるかどうかを自問し、また善意の人が、自分の生涯のさまざまな葛藤をあれこれ考え、色々な生き方がはたして両立しうるかどうかを疑うに至るように、今日の市民たちは人間的な世界が可能であることに確信がもてなくなっている。／しかし、失敗は宿命的なものではない。セザンヌは偶然にうち克った。私たちもまた、危険と責務の見積りを誤りさえしなければ、勝利をかちとることができるのだ。(SNS, 9)

ここで明示されているわけではないが、意味への信頼に基づく偶然性の克服という構想には、意味を与える超越的審級の否定という論点が含まれている。この点は、たとえば巻末のエッセイ「英雄、人間」(1946)に顕著である。ヘーゲル的な英雄(「世界史の諸個人」)には、いまだ現実化していないとはいえ歴史の意味を裏で保証している「宇宙の守り神」がついていたが、「現代の英雄」はそのような超越者を信じていないとメルロ=ポンティは述べる(SNS, 222-223)。サン=テグジュペリに代表される現代の英雄にあるのは「幻想をはぎ取られた信念」であって、それは「私たちが自己を他人に、現在を過去に結合させ、すべてが或る意味をもつようにする運動、世界の混沌とした言説を明確な発語へと仕上げる運動」に他ならない(SNS, 226)。重要なのは私たちが世界の中である意味に向かって自己を投げ出す「運動」である。何者もその成功や正当性を保証してはくれないが、それ以外に意味を回復させる方途はない。この点において、メルロ=ポンティの議論はかつてなく実存主義的な様相を呈している。

もう一つの強調点は、価値の実効性である。平和にせよ自由にせよ真理にせよ、メルロ=ポンティが回復しようと試みる諸価値はそれ自体では戦前の

楽観的な哲学のそれと変わらない。両者を分かちるのは、諸価値はあらかじめ与えられていると見るか、具体的な行為を通して実現せねばならないと見るかの差異である。「何らかの力がなければ実効的な自由は存在しない。自由は世界の手前にあるのではなく、世界との接触の中にある」(SNS, 179-180)。したがって、「戦争は起こった」の結びに見られる次の件も、諸価値を「成就させる (accomplir)」という点にアクセントを置いて読むべきであり、戦前の楽観主義への回帰を目指すものと捉えるわけにはいかない。

1939年に私たちが、自由を、真理を、幸福を、人間の間の透明な関係を望んだことは誤りでなかったし、私たちはヒューマニズムを放棄していない。戦争と占領とは私たちに次のことを教えただけなのだ。すなわち、価値とはこれを存在の中に引き入れる経済的・政治的下部構造なしには名目だけにとどまり、価値とさえもならないのだ、ということ。さらに言うなら、価値とは具体的な歴史の中においては、人間たちの労働、愛情、希望の様式、一言で言えば人間たちの共存の様式に沿って打ち立てられるがままの人間相互の関係を指し示す一つの仕方以外のものではない、ということ。1939年の私たちの諸価値を放棄するのではなく、これを成就させるべきなのだ。(SNS, 184-185)

それゆえ、戦後のメルロ=ポンティが求める平和とは、『知覚の現象学』で語られた幼児の共存でさえもなく、無意味と偶然の地の上で、人間たちの具体的な行為によってのみ辛うじて実現されうるような、ひどく困難なものだと言える。彼の「実効的自由 (liberté effective)」という概念に倣って、それを「実効的な平和と呼んでもいいだろう¹⁵⁾。

それにしても、実効的な価値はどのように成就されるのか。どのような運動によって、あの「幻たちの対話と闘い」は乗り越えられるのか。最後にこの点を考察しよう。手掛かりとなるのは、先ほど引用した「世界の混沌とし

た言説を明確な発語へと仕上げる運動」という言葉である。語るという運動が問題になるわけだが、『意味と無意味』ではこれ以上語られていないので、1948年に放送された「ラジオ講演」の第五章「外部から見た人間」を参照しよう。

メルロ=ポンティは、対自や精神が「実効的自由として成就するのは、言語を使用し、世界の生に参加することによってのみである」(C, 49)と述べて、語ること(あるいは書くこと)が実効的な価値の成就に寄与すると主張する。ここから、従来の方とは異なる人類(人間性)のイメージが得られるという。私と他人が思考という本性を分有しているとか、大文字の存在に吸収されると考えるならば、相互理解はあらかじめ保証されている。しかし実際にはそうではないため、「人類は原理的に不安定である」(C, 50)。不安定とは、相互理解の可能性が絶たれていることではなく、保証なしに取り組まねばならないことを意味する。というのも、「私たち自身という重荷から私たちを解放し、自分の意見をもつことを免除してくれるような多人数での生活など存在しない」(ibid.)からである。個人の自律を前提する楽観的な哲学者なら信じるであろう「絶対的休息」は、現実の私たちが生きる「曖昧な状況」には見出せない(ibid.)。そこでなすべきは、合意を目指して話し合うことに他ならない。

私たちの対立を解消し、誤解された発話を説明し、私たちに隠されたものを明らかにし、他人を知覚するべく、私たちは絶えず努力せねばならない。理性や諸精神の合意は私たちの背後にはなく、推定的に私たちの前方にある。私たちはそれらに決定的に到達することはできないが、かといって放棄することもできない。(ibid.)

実効的な価値とは単なる理念ではなく、世界内に何らかの形で実現すべきものである以上、流転する万物と同様、それが永遠の実在性を得ることはない。

それゆえ決定的な到達は不可能である。他方で私たちは他人たちから離れて生きることもできないから、合意を目指さなければ幻に満ちた混沌に陥ったままになる。メルロ=ポンティにとって、現世に存在するのはこの曖昧な状況だけである。それでも、永続的ではないにせよ価値は実現しうるのだから、言語によってそれを目指さねばならない。「対話の経験」においてこそ、「他人と私の間に共通の地盤が構成され、私の考えと他人の考えがただ一つの生地を織り上げる」からである (PhP, 407)。このように言語の使用によって価値を成就させようと試みること、それが戦争という「没理性の経験」を踏まえてメルロ=ポンティの練り上げた「理性の新たな観念」(SNS, 7) の内実であると思われる。

おわりに

まとめよう。本稿では、暴力から平和への回復というビジョンの下に、まず所与としての平和という従来のメルロ=ポンティ解釈が哲学的著作においても不当であることを示した上で (第一節)、戦後の著作において共存における暴力の根本性が迫り出してくる次第を確認した (第二節)。最後に、所与としての平和から区別して、発話のような行為によって実効性を与えられるべき平和という概念を提示した (第三節)。

精神科医の中井久夫は、「精神科における「回復」とは、発病以前の状態がしばしば不安定な発病要因を含んでいるので、「病気の前よりもよい」(見栄えしなくとも安定した) 状態である必要がある」(中井 2009, p. 35) と述べているが、本稿で見てきたメルロ=ポンティの議論にもこれと通じるものがある。戦前の楽観主義の哲学は、当時の平和がいくつもの例外的な状況のたまたま重なった一時的な状態にすぎなかったというのに、これを自明の所与とみなしていた。他方、「外傷 (traumatismes)」(SNS, 175) とも呼ばれる出来事を経た戦後のメルロ=ポンティは、平和や自由といった価値が経済的・

政治的な下部構造の下支えを必要とすることを明視した。その上で、価値が成就するかどうかは人間の実存的な運動に——それは無からの創造ではなく、偶然と幻影に満ちた現実から一つの方向を浮き彫りにすることだが——かかっていると主張した。そのようにして実現された平和は、戦前の危うい平和を反復することなく、「見栄えしなくとも安定した」ものになるのではないだろうか。

しかし、価値を成就する運動がたとえ対話の形をとるとしても、メルロ＝ポンティはやはりそこにある種の暴力を看取するだろう。平和への平和な道程はありえないのだろうか。どのような局面について、またどのように答えるにせよ、社会生活に取り憑いた根本的な暴力を明るみに出すメルロ＝ポンティの思考は私たちに多くを教えるはずである¹⁶⁾。

付記：本稿は日本学術振興会特別研究員として文部科学省科学研究費(14J00177)の交付を受けて行った研究の成果の一部である。

註

- 1) なお、本稿の主眼からは外れるが、私見ではシシュールの示した選択肢はいずれも誤りであり、いわゆる政治的著作において知覚に関するテーゼが更新されることさえあると言わねばならない。その一例を川崎 2014 で論じた。
- 2) 『『知覚の現象学』以来、身体と世界との関係はまったく幸福なものとしてしか描かれてこなかった。前にも述べたように、『見えるものと見えないもの』にナルシシズムという精神分析の一概念を導入しながらも、同じこの論理が裏に隠し持っている暴力の現象をあたかも否認したかのような形になっている。戦後発表した政治論文において、社会的暴力をあれほどまでに鋭く提起したメルロ＝ポンティの姿を思うとき、誰しもそこに、ある異和感を覚えるのではないか(廣松・港道 1983, p. 179)。「歴史というものが暴力の本来的な場であること」[『弁証法の冒険』からの引用]をひとたび認めたならば、「存在－詩作－論的」に〈人間の自然〉を「真理」「現前」「根源」へと「統合」することそのものが暴力の否認を含むのだから、この否認の深度を測りうる「構想力」こそ求められているのである(高橋 1992, p. 140, 強調原文)。
- 3) 「他人の知覚と間主観的世界が問題になるのは、成人にとってだけである。幼児も一つの世界に生きているが、彼は自分の生きている世界にはそのまわりにいる誰でも何の

苦もなく近づけると信じており、自己自身や他人を決して私秘的な主観性として意識しないし、私たちすべてが、そしてまた彼自身でさえも、世界についての特定の視点に制限されているのではないかと疑いもしない」(PhP, 407)。

- 4) 「身体的一般性は、いかにして疎外不能〈私〉が他人のために自己を疎外しうるかを私たちに理解させることはない。なぜならそれは私の疎外不能な主観性のもつ別的一般性によって厳密に相殺=補完 (compenser) されるからである」(PhP, 411)。
- 5) この点については川崎 2015b を参照されたい。後述の「一般化」に関してもこの論文で『知覚の現象学』との関連を考察した。
- 6) この論点は川崎 2015a で立ち入って考察した。
- 7) 「この楽観主義の哲学は、人間社会を、常に平和と幸福に備えている意識の総和に還元していたが、実のところこれは、辛うじて勝利国となった国の生み出した哲学だった。1914 年の思い出の、想像界における埋め合わせだった」(SNS, 169)。
- 8) 一般化の暴力は『ヒューマンイズムとテロル』でも論じられ、妻や友人といった親密な関係にある他人にも及ぶことが強調される (HT, 128)。
- 9) この言葉は、メルロ=ポンティの意味論への批判を展開する「意義と意味」(1964)でも用いられている。そこでも、知性と知解可能なものを「世界の唯一の面の上で一つに結びつける隣接関係、並列関係、姻戚関係」を主張する「現代哲学の反プラトン主義」(Levinas 1987, p. 32, 強調原文) がメルロ=ポンティに見出されるが、もちろんこの主張はレヴィナス自身の見地とは相容れないものである。
- 10) 本号の寄稿者の一人である松葉類は、レヴィナスの正義論の鍵概念である「第三者」の二つの規定を判明に論じている (松葉 2015)。
- 11) このように政治に関する著作にも病理学的な視点が見出されることを、澤田哲生は『弁証法の冒険』のサルトル論に即して示している (澤田 2012, pp. 159-181)。
- 12) それゆえ、メルロ=ポンティの主張を平和主義と呼ぶことはできない。平和主義とは平和的な手段によって平和に到達しようとする主張だからである (松元 2013)。しかし、平和主義でないからといって平和を目指していないことにはならない。
- 13) この概念は『ヒューマンイズムとテロル』でも重要な役割を果たす。この点は別稿で論じた (川崎 2014)。
- 14) 厳しい批判者からは、歴史に何らかの意味を想定する限りは目的論に陥らざるをえないのではないかと問われるかもしれない。この点については松葉 2010, chap. 3 を参照。
- 15) 実効的自由については、別のところで英雄との関連から考察した (川崎 2016)。
- 16) 本稿は、暴力からの人間存在の回復研究会「メルロ=ポンティとレヴィナス——愛、平和、正義」(2015 年 10 月 17 日、於立命館大学)での発表原稿を改稿したものである。改稿の際、臨床哲学ワークショップ(2016 年 3 月 10 日、於大阪大学)での発表の内容も組み込んだ。発表の機会を与えて下さった加國尚志先生と酒井麻依子氏、司会を

お引き受け下さった藤岡俊博先生に深謝します。また、谷徹先生をはじめ、発表の場で貴重なご意見を賜った皆様にもお礼申し上げます。

文献表

メルロ=ポンティの著作と略号

- SC: *La structure du comportement*, 1942, Paris, P. U. F., coll. « Quadrige », 2009.
 PhP: *Phénoménologie de la perception*, Paris, Gallimard, 1945.
 HT: *Humanisme et terreur. Essai sur le problème communiste*, Paris, Gallimard, 1947.
 SNS: *Sens et non-sens*, 1948, Paris, Éditions Gallimard, 1996.
 EP: *Éloge de la philosophie*, 1953, Paris, Gallimard, coll. « folio-essais », 1989.
 S: *Signes*, Paris, Gallimard, 1960.
 PC: *Parcours. 1935-1951*, Lagrasse, Verdier, 1997.
 PD: *Parcours deux. 1951-1961*, Lagrasse, Verdier, 2000.
 CS: *Psychologie et pédagogie de l'enfant. Cours de Sorbonne 1949-1952*, J. Prunair (éd.), Lagrasse, Verdier, coll. « Philosophie », 2001.
 C: *Causeries. 1948*, établies et annotées par Stéphanie Ménasé, Paris, Seuil, 2002.

その他の文献

- Dufourcq, A. (2012), *Merleau-Ponty: une ontologie de l'imaginaire*, Dordrecht/Heidelberg/London/New York, Springer, coll. « Phaenomenologica ».
 Levinas, E. (1971), *Totalité et l'infini. Essai sur l'extériorité*, 1961, Paris, LGF, Le livre de poche, coll. « Biblio-essais ».
 Levinas, E. (1987), *Humanisme de l'autre homme*, 1972, Paris, LGF, Le livre de poche, coll. « Biblio-essais ».
 Levinas, E. (1990), *Autrement qu'être ou au-delà de l'essence*, 1974, Paris, LGF, Le livre de poche, coll. « Biblio-essais ».
 Montaigne, M. de. (2009), *Essais III*, établie et annotée par E. Naya, D. Reguig et A. Tarrête, Paris, Gallimard, coll. « folio-classique ».
 Saint Aubert, E. de. (2004), *Du lien des êtres aux éléments de l'être. Merleau-Ponty au tournant des années 1945-1951*, Paris, Vrin.
 Sichére, B. (1982), *Merleau-Ponty ou le corps de la philosophie*, Paris, Grasset.

川崎唯史 (2014)、「社会的な生の悲劇——メルロ=ポンティにおける社会性の問題」、『メルロ=ポンティ研究』第18号、メルロ=ポンティ・サークル、40-52頁。

川崎唯史 (2015a)、「メルロ=ポンティと愛の現象学」、『現象学年報』第31号、日本現象

- 学会、125-134 頁。
- 川崎唯史 (2015b)、「メルロ=ポンティにおける社会的な生の優位」、『メタフュシカ』第 46 号、大阪大学文学研究科哲学講座、40-52 頁。
- 川崎唯史 (2016)、「英雄と逃走——メルロ=ポンティにおける二つの自由」、『メルロ=ポンティ研究』第 20 号、メルロ=ポンティ・サークル、2-15 頁。
- 酒井麻依子 (2015)、「現れる他者・消える他者——ソルボンヌ講義「他者経験」をめぐって」、『メルロ=ポンティ研究』第 19 号、メルロ=ポンティ・サークル、1-15 頁。
- 澤田哲生 (2012)、『メルロ=ポンティと病理の現象学』、人文書院。
- 高橋哲哉 (1992)、『逆光のロゴス——現代哲学のコンテクスト』、未来社。
- 中井久夫 (2009)、『精神科医がものを書くとき』、ちくま学芸文庫。
- 廣松渉・港道隆 (1983)、『メルロ=ポンティ』、岩波書店。
- 廣松渉ほか編 (1998)、『岩波哲学・思想事典』、岩波書店。
- 細見和之 (2009)、『「戦後」の思想——カントからハーバーマスへ』、白水社。
- 松葉祥一 (2010)、『哲学的なもの政治的なもの開かれた現象学のために』、青土社。
- 松葉類 (2015)、「レヴィナスによる二つの第三者論：「眼差しの中の第三者」と「隣人の隣人」」、『宗教学研究紀要』第 12 号、京都大学文学研究科宗教学専修、118-131 頁。
- 松元雅和 (2013)、『平和主義とは何か 政治哲学で考える戦争と平和』、中公新書。
- 村上靖彦 (2011)、『治癒の現象学』、講談社選書メチエ。
- 八幡恵一 (2010)、「主著解題『意味と無意味』」、『KAWADE 道の手帖 メルロ=ポンティ』、河出書房新社、46-48 頁。

